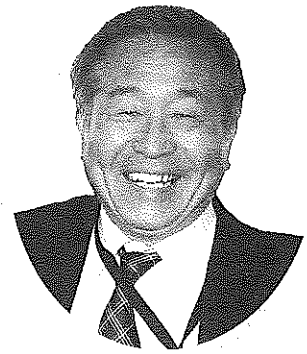


和顔愛語



佐藤 昭二

名前が付くと言う事は

私の周りには沢山の人がいる、沢山のものが有る。そしてその全てに名前が付いている。名前の無いものは無い。かつて昭和天皇は「雑草と云う草は無い、この世の全てに名前が有る」と言われた。名前が付くと言う事は働き（役割）を意味する事である。私には、天皇陛下は私達が名も知らない小さな草花においても一つひとつの働き（役割）が有ると申された様に思える。

「名前が働き（役割）を意味する」これは大変重い意味を持っている。子供が生まれた時「命名」と書き、その下に子供の名前を書いて氏神様に報告する。「この子供を命持ち（みこともち）として世のため人のためにふさわしくお使い下さい…」と云う意味である。命名とは、子どものこの世での役割を天に求める儀式なのである。ところが、その本質を現在の人はどうやら忘れてしまっているようだ。それは、「言葉」に対する姿勢で見て取れる。残念ながら今の社会はこの言葉が大変乱れている。言葉が乱れると言う事は必ず形に現れて来る。社会が乱れるということだ。

過去に我が子に「悪魔」と名前を付けようとした親が居た。役所の受付係の機転で事無きを得た様に記憶して居る。この様な行いをする人の心の奥に潜むものは、「子どもは自分の所有物であり、所有者の私がどのように扱おうと構わない」という姿勢である。このとき、子どもは人間では無く、一個の“物”として扱われている。天から授かり、預かる子どもをそのように考えるとき、「天」への畏敬の念が霧散していることになる。そこには「世のため人のため」という意識も無い、目先の都合、不都合で動いている人間の姿が見えて来る。

悲しいかなこの現象は我が子に名前を付けようとする親だけの問題ではない。政治の世界にも、官僚の世界にも、財界の世界にも見えている。肩書きが付き、呼び名が変わって来る時、人間の働き（役割）も変わって来るのであるが、今の社会は肩書きが付いて、呼び名が変わって来てもそれに準じた働き（役割）と責任を取る行為が行われ

ていない。「言葉の本質」を大事にしていないのだ。聞こえてくるのは常に新聞やテレビを賑わしている弁解の声だけである。

しかし、これは人ごとではない。私達一般家庭においても同じ事が言える。“夫”と名前が付いた時、“父”と名前が付いた時、“妻”と名前が付いた時、そして“母”と名前が付いた時、それぞれの働き（役割）が変わり、また増え、それに準じた責任が付いてくるのである。言葉として名前が付くとき、天から働き（役割）と責任を与えられること、これは正に法則である。しかして、親がこの法則から逃げた時、または気付かずに無視した場合、往々にして敏感に子どもに察知され、子どもの精神が不安定な状態になる。時に子どもが破綻してしまう例も決して少なくはない。

私達は名前と言葉と行動は一体である事を知らねばならない。

日本は「言霊の幸はふ国」と「万葉集」の時代から言われている。私たちが日本人であるならば言葉を大事に使っていきたいものだ。そしてそれは、日本人にとどまらず、世界中の人々にも重要なことである。

なぜならば聖書に曰く、「はじめに言葉ありき、言葉は神なり、言葉は全てなり…」

毎年世界で最も売れている書籍にもそう記されている。

言霊（ことだま）とは…日本では声に出した言葉が現実の事象に対して何らかの影響を与えると信じられ、良い言葉を発すると良い事が起こり、不吉な言葉を発すると凶事が起こるとされた。ここから、日本は言霊の力によって幸せがもたらされる国「言霊の幸はふ国」とされた。言霊思想は万物に神が宿るという信仰だけではなく、心の存り様をも示す道徳倫理的な日本人の規範でもあった。